

地元の大学と連携

信頼の高さに魅力

金沢の知財を活用するため立ち上がったベンチャーもある。マイクロアレイを用いた血液検査の受託・解析を行うキュービクスは、金沢大学医薬保健研究域医学系の金子周一教授の協力のもと、消化器系がんに特異的に発現する遺伝子情報を活用し消化器系がんのスクリーニング事業を展開する、大学発のベンチャーとして期待を集めている。

代表取締役社長の丹野博氏は、「長年、大手製薬会社でC型肝炎の治療薬販売に従事した経緯から、全国の肝臓専門医との人脈があったほか、北陸でも18年間MRとして働いていたため多くの医師とつながりがありました。金子研究室が保有する遺伝子発現データは、世界でも類をみない約80万種類という膨大な数です。これを活用して臨床応用まで事業化してくれる人はいないかと金子教授から相談を

受けたことが起業のきっかけで「した」と当時を振り返る。

同社のマイクロアレイ血液検査で調べられるのは、胃がん、大腸がん、膵臓がん、胆道がんの4つ。早期がんを含むがん患者の検査結果をまとめた論文等で感度は98%と発表されており、人間ドッグなどで実施されている各種瘍マーカー検査の感度と比べると驚異的な数値だ。現在は、乳がん、肺がんを含む8つ器官のがんを血液検査だけで一度に発見できる次世代型検査の開発にも取り組んでいる。

「検査自体に対する評価は、日本で3番目に古く歴史のある金沢大学医学部の臨床研究ということで高い信頼を寄せていただいています。臨床試験も、大学の強みを活かして、金沢市内だけでなく北陸3県の広範囲で行うことができました。こうした地盤のある金沢で事業をスタートできたことは大きな収穫です」(丹野氏)。

一方で、課題も存在する。検査に使用するマイクロアレイ、試薬が高価なため利用者の金額負担が大きい。利用拡大を図るには、利用者負担の軽減、迅速性といった課題を解決しなければならぬ。現在は各医療機関に個別に説明し理解してもらう

必要があり、「現段階では、情報発信の面で地方のハンデを実感せざるを得ない」と丹野氏。

「18年の実用化を目的にいま開発している次世代型検査の手法なら、恐らく薬事承認を得ることができるとは思います。そうなれば病院へのアピールも容易になり、病院側も採用しやすくなります。費用面でもより患者負担の少ない検査方法として広がっていくでしょう」(丹野氏)。

3社はともに、大都市にはない金沢の魅力を活かして、事業を展開している。事業内容次第では、地方都市でも十分に戦うことができることの証だろう。



(写真左)血液検査の解析作業。乳がん、肺がんを含む8つの器官のがんを血液だけで発見できる次世代型検査の開発にも取り組む
(写真下)キュービクスが開発した血液検査を行うマイクロアレイ。98%の確立で胃がん、大腸がん、膵臓がん、胆道がんを発見する
(画像提供:キュービクス)

